

『源氏物語』と「からころも」

—— 歌語史からみる末摘花詠歌 ——

Genji Monogatari and “*karakoromo*” (poetic word composed by Suetsumuhana)

— From the view point of the history of waka(31-syllable Japanese poem) —

要旨

『源氏物語』で末摘花の和歌に詠み込まれる「からころも」は、その滑稽な造型を描くキーワードであることが、繰り返し指摘され、歌語としては『源氏物語』以前の印象の強い語であることが明らかにされてきた。本稿では、これまであまり言及されてこなかった詠者の観点から、いま一度歌語「からころも」を検討し、勅撰和歌集のみならず、私家集、特に『貫之集』、『元良親王集』に着目して和歌史のなかで生成される「からころも」のイメージを明らかにし、『源氏物語』にこの語がとりこまれる意味について考える。

植田 恭代
UETA Yasuyo

はじめに

『源氏物語』の作中詠歌は詠み手その人を表し、詠み込まれる歌語もその一端を担う。物語に零落した故常陸宮の姫宮として描かれる末摘花の場合、光源氏との贈答に詠まれる「からころも」は、その滑稽さを印象づけるキーワードとしてある。

歌語「からころも」については、『万葉集』の時代から詠まれ、平安時代に入り定着し、『後撰集』をひとつの盛りに、勅撰和歌集や私家集に広く詠まれていることが確認されている^①。先覚の指摘に導びかれつつ、あらためて和歌の詠み手という観点からながめてみると、必ずしも十分な言及はされておらず、検討の余地がある。歌語のイメージは、一首の内容とともに、その作者とも密接に関わって生成されていくはずである。本稿は、和歌史における「からころも」詠歌の作者に着目しながら、いま一度、末摘花の詠歌の「からころも」について考察を試みるものである。

一、末摘花の和歌と「からころも」

まず、『源氏物語』における「からころも」の用例を確認することから始めたい。『源氏物語』中「からころも」は全七例あり、それらはすべて末摘花の和歌とそれに応じる光源氏の和歌に詠み込まれている。

陸奥国紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは深う染めたまへり。いとよう書きおほせたり。歌も、

からころも君が心のつらければたもとはかくぞそぼちつつのみ心得ずうちかたぶきたまへるに、つつみに衣箱の重りかに古代なる、うち置きておし出でたり。

末摘花 二九八―二九九頁

御文には、いとかうばしき陸奥国紙のすこし年経、厚きが黄ばみたるに、「いでや、賜へるは、なかなかこそ。

きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして」

玉鬘 一三七頁

御小桂の袂に、例の同じ筋の歌ありけり。

わが身こそうらみられけれ唐衣君がたもとなれずと思へば

行幸 三二五頁

「あやしう。人の思ひよるまじき御心ばへこそ、あらでもありぬべけれ」と、憎さに書きたまうて、

唐衣またからころもからころもかへすがへすもからころもなる

行幸 三二五頁

全七例の内訳は、末摘花巻と、光源氏の衣配りへの返歌が描かれる玉鬘巻に各一例ずつ、行幸巻で珍妙な衣裳を贈る末摘花詠歌の一例、それに応じる光源氏が「からころも」で仕立てた一首に詠み込まれる四例。

この語は、末摘花巻の後日譚的な蓬生巻にはみられない。

末摘花は故常陸宮を父とするが現在には困窮し、趣味は古めかしく、背が高く痩せて鼻は普賢菩薩の乗り物すなわち象のようだと描かれる。光源氏の庇護のもと二条東院に迎えられても、その造型は一貫し、そのキードのように「からころも」が繰り返される。

末摘花の好む歌語「からころも」については、『後撰集』時代の歌語であることがよく指摘され、電子データによる検索可能な時代を迎え、歌語史の側からその詳細な使われ方が明らかにされている。^③「からころも」は装束の実態という観点からも着目されてきた語で、高麗系の装束という指摘がある。^④また、『貫之集』所収歌の「からころも」が美しい女性を表し得る語であるとも言われる。^⑤

一方、「からころも」を詠み込む和歌の詠者については、よみ人しらず歌が多いこと、貫之に散見することなどに言及されてきたが、^⑥宮廷社会における和歌の浸透を考える際に、詠者はさらに重要な観点になり得よう。和歌が受けとめられる時、作者や周辺事情と密接に絡み合っており、人口に膾炙する。ここでは、和歌の歴史のなかでおのずと生成されていく「からころも」のイメージを、広く作者にも目を向けて検討していく。

二、歌語「からころも」

和歌史における歌語「からころも」の用例は、『万葉集』からあり、「或本曰」とある異伝歌一例も含めて、雑歌、寄物陳思、相聞に全六例が確

認できる。^⑦いずれも作者は未詳、表記は「韓衣」「辛衣」「可良許呂毛」「可良呂毛」と一様ではない。これらの「からころも」は実態としての衣服にもとづく語であり、そこから「着る」の音に通じる「き」や「裁つ」に通じる「たつ」、さらには「裾」が呼び起こされる。「からころも」は、のちの「からぎぬ」(唐衣)とは別の装束である。

「からころも」は、『和漢朗詠集』『新撰万葉集』などの私撰集、私家集の『人丸集』『家持集』『蟬丸集』などにもあり、平安時代に編まれた勅撰和歌集に入集し、定着の様相をみせる。ここで、あらためて八代集の「からころも」の用例数を確認しておく。

古今集	十首
後撰集	二十一首
拾遺集	十首 (拾遺抄 五首)
後拾遺集	七首
金葉集	四首 (二度本、三奏本は三首)
千載集	六首
新古今集	七首

三代集では『古今集』十首、『後撰集』二十一首、『拾遺集』十首と続き、『後撰集』に集中した後、減少する。『源氏物語』を考えるうえで関連の強い三代集の「からころも」詠歌を、今度は作者に注目し、部立てと歌番号を記してみると次のとおりである。

三代集にみる「からころも」詠歌の作者

『古今集』

よみ人しらず

四首

離別歌・三七五、恋歌一・五一五、雑歌上・八六五、雑歌下・九九五

つらゆき

二首

恋歌二・五七二、恋歌四・六九七

在原業平朝臣

一首

羈旅歌・四一〇

藤原ただふさ

一首

恋歌二・五七六

かげのりのおほきみ

一首

恋歌五・七八六

いなば

一首

恋歌五・八〇八

『後撰集』

よみ人しらず

十二首

秋中・三二三、秋下・三五九・三八三、恋一・五一九・五三九、恋二・六二三、恋三・七二三、恋四・八四八・八四九、恋五・九四八、離別 羈旅・一三二八・一三二九

つらゆき

二首

秋下・三八六、恋二・六六〇

桂のみこ

一首

恋一・五二九

閑院左大臣

一首

恋三・七二九

右近

一首

恋三・七四六

源巨城

一首

恋四・八〇四

雅正

一首

雑一・一一二四

公忠朝臣

一首

離別 羈旅・一三二六

女

一首

離別 羈旅・一三二七

『拾遺集』

よみ人しらず

五首

別・三三二、恋二・七〇三・七〇四、

つらゆき

三首

雑賀・一一八九、雑恋・一二三五

三条皇太后宮

一首

秋・一四九・一八七、別・三三七

別・三三六

一首

『古今集』では、よみ人しらず歌がもつとも多く四首、固有名詞が明記される六首は、つらゆき（貫之）二首、他は一首ずつである。また、

十首中六首が恋の部立てのなかに収められる。『後撰集』では、「からころも」を詠む全二十一首中よみ人しらず歌十二首、固有名詞が明記される歌ではつらゆき二首、その他は一首ずつである。『拾遺集』は全十首中五首がよみ人しらず歌、固有名詞が明記される四首のうち三首がつらゆきである。

三代集では、いずれもよみ人知らず歌がもつとも多く、『後撰集』では半数をこえる。もちろん、よみ人しらず歌が本来の作者不明歌であるとは限らず、勅撰集に入集するにあたり、なんらかの都合上あえて作者名を伏せる場合もあるのは周知のとおりだが、一方で伝承性の強い歌が多

いこともまた否めない。

いま、『古今集』のよみ人しらず歌をあげてみる。

題しらず

唐衣たつ日はきかじあさつゆのおきてしゆけばぬべきものを

『古今集』離別 三七五

唐衣ひもゆふぐれになる時は返す返すぞ人はこひしき

『古今集』恋歌一 五一五

うれしきをなにつつまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを

『古今集』雑歌上 八六五

たがみそぎゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへてなく

『古今集』雑歌下 九九五

本来は舶来の衣装を表す「からころも」が衣の美称となり、衣の連想から「たつ（裁つ）」「ひも（紐）」「たもと」などの語が導かれる。これらの歌をみるかぎり、誰かの名を伏せた事情は読み取れない。伝承性の強い和歌のなかに「からころも」が詠まれている。

二、貫之と「からころも」

一方、特定の人物と結びつきの強い「からころも」もある。『古今集』に入集する業平の和歌は、『伊勢物語』東下り章段の「かきつばた」の折句でも有名な一首である。

在原業平朝臣

唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ

『古今集』羈旅歌 四一〇

この歌は、業平ならびに『伊勢物語』の知名度とともに、広く人口に膾炙し、後世の琳派による絵画の題材ともなっていく。この業平詠歌のほか、「からころも」を詠む三代集の作者記名歌では、「つらゆき」が『古今集』二首、『後撰集』二首、『拾遺集』三首でもっとも多い。

紀つらゆき

君こふる涙しなくは唐衣むねのあたりは色もえなまし

『古今集』恋歌二 五七二

しきしまややまとはあらぬ唐衣ころもへずしてあふよしもがな

つらゆき

『古今集』恋歌四 六九七

から衣たつたの山のもみぢばははた物もなき錦なりけり

(つらゆき)

『後撰集』秋下 三八六

女のもとにまかりたりけるを、ただにて返し侍りければいいい
れ侍りける

つらゆき

怨みても身こそつられ唐衣きていたづらにかへすとおもへば

『後撰集』恋二 六六〇

延喜御時月次御屏風に

つらゆき

たなばたにぬぎてかしつる唐衣いとど涙に袖やぬるらん

『拾遺集』秋 一四九

延喜御時の御屏風に

つらゆき

風さむみわがから衣うつ時ぞ萩のしたばもいろまさりける

『拾遺集』秋 一八七

橘公頼帥になりてまかりくだりける時、としさだが継母内侍の
すけの、むまのはなむけし侍りけるに、さうぞくにそへてつか
はしける

つらゆき

あまたにはぬひかさねねど唐衣思ふ心はちへにぞありける

『拾遺集』別 三三七

『古今集』五七二番歌は赤い色を表すための「からころも」が渡来の
紅色である「^{かうれな}韓紅」を思わせ、六九七番歌は「やまと」との対比で「唐
衣」が導かれる。その他は、「衣」の縁語で「きる」「たつ」「うつ」「袖」
「ぬふ」などが詠まれている。『拾遺集』の二首は、詞書に「延喜御時」
の「月次御屏風」「御屏風」とあり、延喜時代の屏風歌である。

一方、複数の私家集にも広く「からころも」が詠まれており、歌語と
しての定着がうかがえる。三代集周辺の私家集に目を向けると、『業平集』
一首、『躬恒集』二首、『友則集』二首、『忠岑集』一首、『延喜御集』二
首、『兼輔集』一首、『伊勢集』四首、『宗子集』二首、『敦忠集』二首、
『元良親王集』十一首、『貫之集』十六首、『公忠集』三首、『清正集』二
首、『朝忠集』一首、『元真集』八首、『村上天皇御集』三首、『清慎集』
六首、『実頼集』五首、『本院侍従集』三首、『一条摂政御集』二首、『伊
尹集』二首と続く。ここに同じ歌は数えていないが、用例数は『貫之集』
がもつとも多く、そのなかには先にあげた三代集入集歌と重複する歌も
含まれるが、家集の側からあらためてながめると屏風歌がさらに散見する。

みなづきのはらへ

みそぎする川のせみればから衣ひもゆふぐれに浪ぞ立ちける

『貫之集』一一、『新古今集』夏歌 二八四

七月七日

たなばたにぬぎてかしつるから衣いとど涙に袖やくちなむ

『貫之集』二二、『拾遺集』秋 一四九

これは「延喜六年つきなみの屏風八帖がれうのうた四十五首、せじにてこれをたてまつる甘首」とあるなかの二首。田中喜美春氏は「延喜六年二月廿六日御記云、於^ニ襲芳舎^一書^ニ御屏風^一」（古今和歌集目録・素性）とある折のものかとする。醍醐天皇の命によって屏風歌四十五首のなかの二十首を奉ったものである。

続く「延喜十三年十月内侍屏風のうた、うちのおほせにてたてまつる」と記すなかにも一首ある。

月夜に衣うつ所

から衣うつこゑきけば月清みまだねぬ人を空にしるかな

『貫之集』二五

また「延喜十七年八月宣旨によりて」にも一首。

八重葎おひにし宿にから衣たがためにかはうつ声のする

『貫之集』八四

「延喜十七年の冬なかつかさの宮の御屏風の歌」には次の一首が見出せる。

元日

から衣あたらしく立つとしなれば人はかくこそふりまさりけれ

『貫之集』九〇

『拾遺集』入集の一首を含め、これらはみな延喜時代の屏風歌である。さらに、「京極の権中納言の屏風のれうの歌甘首」にも一首ある。「京極言の権中納言」は紫式部の曾祖父で「堤中納言」と呼ばれた藤原兼輔、延長五年（九二七）正月に権中納言になる。

雁鳴きて吹く風さむしから衣君待ちがてにうたぬよぞなき

『貫之集』二六二、『新古今』秋歌下 四八二

延喜より数年くだるが、醍醐朝の屏風歌である。ちなみにこの「京極中納言」すなわち堤中納言兼輔にまつわる『貫之集』の歌が他にもある。七九一番歌の詞書に「京極中納言うせ給ひて後、あはたにすむ所有りける、そこにゆきて松と竹とあるをみて」とあり、続いて「おなじ中納言うせたまひて後」とする七九二番歌である。同じ歌が重複して収められている。

かげにとて立ちかくるればから衣ぬれぬ雨ふる松のこゑかな

『貫之集』七九二、『新古今』雑歌中 一六八三

おなじ中将のみもとにいたりて、かれ是松のもとにおりゐて、
酒などのむついでに

かげにとて立ちかくるればから衣ぬれぬ雨ふる松の声かな

『貫之集』八四五

これは亡き京極中納言を悼んでの歌。堤中納言兼輔は貫之が土佐守在任中の承平三年(九三三)に五十七歳で薨去。詞書に延喜の語はないが、醍醐朝を生きた人である。ここにも「からころも」があり、時代の印象を強める。

また、屏風歌とは記されないが、延喜と明記される賀の歌も見出せる。

延喜十二年十二月春立つあしたに、さだかたの左衛門督のない
しのかみに賀たてまつれる時のうた

ことしおひのひくはまゆのから衣千世をかけてぞいはひ初めける
『貫之集』六九九

定方が賀を奉ったのは、同母妹藤原満子。「にひくはまゆ」は「新桑繭」で、繭の衣に寄せての賀歌である。

『貫之集』の「からころも」詠歌には、延喜の屏風歌と明記される六首、「延喜」と明記される賀歌一首、京極中納言を悼む歌二首(重複を含む)があり、このほか「恋」に五首、「別」に三首である。¹⁰⁾

貫之であれば延喜、醍醐朝の印象が強いが、とりわけ延喜の屏風歌と

明記する歌が複数確認でき、貫之の屏風歌が歌語「からころも」の定着を促し、歌語のイメージをも固めていく様相がうかがえる。「京極中納言」や「延喜」と詞書にうたう和歌も、時代の印象を強める一助となろう。延喜の宮廷歌人である貫之に好まれたことが、「からころも」の歌語としての定着を促し、同時に歌語じたいのイメージ生成にまで及んでいく。¹¹⁾

三、『元良親王集』と「からころも」

業平や貫之ほど注目されていないが、歌語「からころも」を考えるうえで、もうひとつ見逃せないのは、十一例が確認される『元良親王集』である。元良親王は陽成天皇第一皇子、母は藤原遠長女。『尊卑分脈』によれば天慶六年(九四三)七月二十六日薨去、五十四歳。『本朝皇胤紹運録』には「三品兵部卿 母主殿頭藤原遠長女」とあり、『日本紀略』天慶六年七月廿六日条にも「兵部卿三品元良親王薨」と記される。そのエピソードは『大和物語』『今昔物語』『江談抄』などに伝えられ、色好みで知られる親王である。『元良親王集』は、親王に関わる女性たちの側からほぼ年代順に編まれている歌集であり、「からころも」詠歌も恋の贈答にある。¹²⁾

かくさだめなくあくがれたま^(マ)けれど、いとこころありてをかし
うおはするみやときき給ひて、大夫の宮す所の御はらの女は、
宮にあはせたてまつりてあしたに、をとこ宮

ほどもなくかへるあしたのからころもこころまどひにいかできつらん

『元良親王集』六〇、『秋風集』恋歌中 八一二

『新後拾遺集』恋三 一一四四

返し

ときのまにかへりゆくらんからころもこころふかくやいろのそまぬと

『元良親王集』六一

六〇番歌の詞書「かくさだめなくあくがれたま^(マ)けれど」は、さまざまな女性たちのもとへ通っていたこと。直接的には、この歌の前に配列された監の命婦、一条蔵人、たきき、民部の卿・いはや君・京極御息所・閑院の三姉妹などをさす。詞書は、あちらこちらに通い所のある宮ながら、情趣を解する魅力的な宮とお聞きになって大輔の御息所腹の女八宮すなわち醍醐天皇の第八皇女修子内親王と結婚させた、その翌朝、親王から、という。これは親王の贈歌と修子内親王の返歌である。修子内親王は、『本朝皇胤紹運録』に「無品 母更衣満子女王。民部大輔相輔女」、『日本紀略』承平三年(九三三)二月五日条には「無品脩子内親王薨^(先帝第)八皇女」とある。修子内親王は親王の四十賀を催していることから、晩年の正妻とみなされる。六〇番歌の「あしたのからころも」は女性と出会った翌朝の唐衣、「きつらん」の「き(着)」を導き、「からころも」と「着る」は縁語。返歌は「からころも」が色深く染まらないの意、愛情が染まら

ないことを表す。

続く六十二番歌は、修子内親王が親王の装束を母御息所に縫ってもらよう頼んだ時に母御息所が詠んだ歌である。

はは宮す所の心の御ぞのほころびぬひにたてまつれたまへりければ、宮す所

かへしけるひとからころもと思ふにはつねならぬかぞしひてめでたき

『元良親王集』六二

「ひとからころも」は「人から」と「唐衣」を掛け、上の句は返した人ゆえの意。一首は、親王ゆえ常ならぬ香が漂うすばらしさを賞讃する。掛詞にもなる「からころも」が、前に置かれる二人の贈答と響き合う。しかし、「よみ人しらず」とありながら修子内親王の元良親王を恨むような一首をはさみ、「からころも」を詠みこむ六四番歌は、別の女性との恋を伝える。

……略……おなじおほん中にまだしくおはしけるととき、この宮におはしはじめて又の日、京極のみやす所のおもとにたてまつりたまひける

いとどしくぬれこそまされからころもあふさかのせきみちまどひして

『元良親王集』六四

宮す所の御返し

まことにやぬれけりやとくからころもここにきたらばとひてしほらむ

『元良親王集』六五

詞書によれば、修子内親王との仲がまだそれほど親しくなかった時、修子内親王のもとにいらつしやり始めてまたの日、京極御息所にさしあげた歌、という。京極御息所は、藤原時平の娘、褒子。『尊卑分脈』には「号京極御息所 宇多天皇后」とあり、島田とよ子氏に詳細な伝記研究があり、宇多天皇の晩年に入内し、雅明、載明、行明の三親王の母となつた女性であることが知られる。本歌集三五番歌は京極御息所がまだ亭子院にいた時の歌で、『大和物語』六一段はその後河原院に移つたことを伝える。親王の六四番歌では居場所が明らかにされないが、上の句は逢坂の関で道に迷い衣がますます濡れる意、一首は歌枕に反して逢えないことを詠む。¹⁵⁾

六五番歌は京極御息所の返歌。「とくからころも」は「とく」が「とも」の誤写かともされるが、ここにいらしたら濡れた衣を絞ってあげますのに、という大意は動かない。京極御息所のところへ来られないのは、修子内親王のもとに行くからに他ならない。京極御息所褒子は宇多天皇晩年の后であるから、親王との恋は密通になる。色好みの親王と後の危険な密通が発覚すれば、宮廷社会の噂にのぼるのは必定である。続く六六番歌も京極御息所の歌である。恋が露見してもなお、京極御息所への恋情を募らせる親王の歌は勅撰集に繰り返し入集し、『百人一首』でもよく

知られる。

こといできてのち、宮す所に

わびぬればいまはたおなじにはなるみをつくしてもあはんとぞ思ふ

『元良親王集』一二〇、『後撰集』恋五・九六〇、

『拾遺集』恋二・七六六、『拾遺抄』恋下・三二七、

『古今六帖』みをつくし・一九六〇

この詞書は「事いできてのちに」と、二人の恋が発覚したことを伝える。『拾遺集』『拾遺抄』では「題しらず」とあり、『元良親王集』の詞書が『後撰集』によって増補された可能性も高いが、そう記されるほど親王の恋情は人口に膾炙したと考え得る。

『元良親王集』のそのほかの「からころも」詠歌は、修子内親王をはじめ複数の女性たちとの贈答である。

宮

いにしへをおもひにあへぬからころもぬるるほどなくかわきこそすれ

『元良親王集』七一

六九番歌から修子内親王の亡くなった歌が続き、七一番歌も生前の修子内親王を思い衣が涙で濡れる意を詠む。「からころも」は衣を表す美称で、それが濡れるという。

なににきみ思ひかけんからころもひとめもみてはとはじものゆゑ

『元良親王集』七六、『後撰集』恋四・八四

八・よみ人しらず 初句「中中に」

みや

たのまれぬこともころのからころもなれてよとやさらばおもひし

『元良親王集』八六

七六番歌は配列からすれば、前の七五番歌と同じ女の歌かと推定される歌で、七五番歌は修子内親王に仕える女性かとされるところ。「思ひかけ」の「かけ」と衣の糸目から「ひとめ」を呼び出し、修辭のなかに「からころも」がある。

八六番歌は直前にある八五番歌と同じ女への返歌と推定される歌、「ころのから」「からころも」がかけられる。「心から」とあるべきところ、「ころのから」と語調を整えたのかと解釈され、「濡れ」「繕る」が衣の縁語になる。

ときこえたりければ、宮

くさまくらちりはらひにはから衣たもとゆたかにたつをまてかし

『元良親王集』一一〇

又、をんな

からころもたつをまつまのほどこそはわがしきたへのちりもつもらめ

『元良親王集』一一一

かねもちの宰相のむすめに

そむれどもこそまさらぬからころもいろのかぎりきてみつるかな

『元良親王集』一五四

一一〇歌の「女」は、一〇九番歌の詞書に「のぼるの大納言のみむすめ」とある大納言源昇の娘⁽¹⁾。これらは三首は『大和物語』一四〇段で知られる贈答である。「からころも」の袂を豊かに裁つという表現は、『古今集』雑上・八六五番の（よみ人しらず）「からころも」詠歌により、女の方は、「からころも」を裁つまで待て、と言っけれど、と切り返す。一五四番歌は藤原兼茂の娘に贈った歌。「からころも」の染まる色合いの濃さが愛情の濃さを表す。

『元良親王集』の歌語「からころも」は、恋の贈答に繰り返し詠まれる。正妻と考えられる内親王のみならず、宇多天皇妃との許されざる恋となれば、人の噂にのぼり、それを伝える詠歌が宮廷社会で人口に膾炙したことは、想像に難くない。それは、私家集であるからこそ伝えられる一側面と言っべきかもしれない。「かきつばた」の折句や延喜の屏風歌で広まり定着しつづつあった歌語は、色好みの親王の恋の贈答に頻出することによって、時に危険さえ孕む華麗な恋のイメージを帯びてくる。

こうした「からころも」の歌語史のうえに、『源氏物語』の「からころも」もある。

四、末摘花へ

翻って『源氏物語』をみる。末摘花の詠む最初の「からころも」は、光源氏の元日用装束に添えて贈られた歌にあり、実際の装束に合わせている。「きみ」の「き」にかけ、「たもと」は縁語。「きる(着る)」の「き」にかける用法はこれまであげてきた歌にも確認されるとおり、歌語「からころも」の常套的な詠みくちであるが、「きみ」の「き」にかけるのは無理がある。一首の五句「そぼちつつのみ」は袖を涙で濡らすばかりの意。それは玉鬘巻の「からころも」詠歌でも踏襲され、顧みられぬ女の恋を表す。歌語「からころも」として考えれば、『源氏物語』以前の印象が強い歌語「からころも」を末摘花が好むのは、古風な姫宮の造型に見合う。さらに、色好みの宮との恋に頻出したことに着目すると、「からころも」は華麗な恋のイメージをも想起させる歌語であり、物語では、それを覆すように用いることによって、まるで対極にあるような姫宮の造型、ひいては光源氏の恋そのものの滑稽さが強調される。ちなみに、「からころも」の袖が濡れるというのは定番の詠み方であるが、『元良集』の京極御息所との贈答六四・六五番歌や修子内親王を悼む七一番歌とも通じてくる。その語を、末摘花が好み光源氏に詠み贈るのである。

「からころも」は『源氏物語』に先駆ける長編物語の『うつほ物語』

にも五例あり、それらはいずれも、衣の縁語をともなう歌語である。⁽¹⁸⁾「祭の使」の兼雅詠歌には「いく度か夜に返すらむ唐衣かへすがへすもうらみらるるは」とあり、行幸巻の光源氏のなげやりな「かへすがへすも」と類似し、『源氏物語』は『うつほ物語』を意識していることがうかがえる。しかし、『うつほ物語』では五例の詠み手がすべて異なり、『源氏物語』はひとりの女性のキーワードに据える。『源氏物語』は歌語「からころも」の歴史から生成されるイメージを掘り上げ、さらに反転させることによって、個性的な女性をめぐる光源氏の物語を紡ぎ出しているのである。

注

- (1) 後藤祥子「源氏物語の和歌―その史的位相―」『源氏物語と和歌 研究と資料Ⅱ―古代文学論叢第八輯』(武蔵野書院 一九八二年)。伊井春樹「うた」とば「からころも」考―『源氏物語』末摘花詠歌の史的背景―『源氏物語論とその研究世界』(風間書房 二〇〇二年)など。
- (2) 注(1) 後藤氏論文。
- (3) 注(1) 伊井氏論文。
- (4) 片岡智子「からころも(韓衣・唐衣)」考 歌語の実態と消長『国際日本文学研究集会会議録(第15回)』(国文学研究資料館 一九九二年三月)。
- (5) 田中喜美春「貫之が脱いだ唐衣」『国語と国文学』一九九五年一月。「からころも」を脱ぐという表現が妻との関係解消を意味すると述べられる。
- (6) 注(1) 伊井氏論文。

(7) 『万葉集』の用例は次のとおりである。なお、本稿における和歌の引用は、すべて新編国歌大観(角川書店)による。

韓衣 服櫛乃里之 嶋待尔 玉乎師付牟 好人欲得
からころも きならのさとの つままつに たまをしつけむ よきひとがも

『万葉集』巻六 雑歌 九五七

雁鳴乃 来鳴之共 韓衣 裁田之山者 黄始有
かりがねの きなきしなへに からころも たつたのやまは もみちそめたり

『万葉集』巻十 秋雑歌 二一九八

朝影尔 吾身者成 辛衣 襦之不相而 久成者
あさかげに あがみはなりぬ からころも すそのあはずて ひさしくなれば

『万葉集』巻十一 寄物陳思 二二六六

辛衣 君尔内著 欲見 恋其晚師之 雨零日乎
からころも きみにうちきせ みまくほり こひぞくらし

『万葉集』巻十一 寄物陳思 二二六九〇

柿本朝臣人麿歌集中出、見上已記也

可良許呂毛 須蘇乃字知可倍 安波祢杼毛
からころも すそのうちかへ あはねども

家思吉呂許呂乎 安我毛波奈久尔
けしきこころを あがもはななくに

可良呂毛 須素乃字知可比 安波奈敝婆
からころも すそのうちかひ あはなへば

『万葉集』巻十四 相聞 三五〇一

(8) 拙稿『源氏物語』と時を表すことば―ふたつの舞楽場面から―『むらさき』武蔵野書院 二〇一〇年)でふれているので、あわせてご参照いただければ幸いである。

(9) 和歌文学大系 19 『貫之集 躬恒集 友則集 忠岑集』(明治書院 一九九七年)。「貫之集」は田中喜美春氏が担当。

(10) 『貫之集』第五「恋」の五首をあげる。

君こふる涙しなくはから衣むねのあたりは色もえなまし

『貫之集』五七八、『古今』恋二・五七二

敷島のやまとはあらぬから衣ころもへずしてあふよしもがな

『貫之集』五八五、『古今』恋四・六九七
君によりぬれてぞわたるから衣袖は涙のつまにざりける

『貫之集』六二二

から衣袂をあらふ涙こそ今は年ふるかひなかりけれ

『貫之集』六五八

人めゆく涙をせけばから衣袂はぬれぬねこそなかるれ

『貫之集』六八九

『貫之集』第七「別」の三首は次のとおりである。

みちの国へくだる人ををしめる

から衣するなにおへる富士の山こえん人こそかねてをしけれ

『貫之集』七二七

（たちばなのきむよりのそちのつくしへくだる時、其このあはのかみとし
さだのあそん、ままははのないしのすけにおくるものどもにくはへたる歌
さうぞく

あまたにはぬひかさねねどから衣おもふ心はちへにざりける

『貫之集』七四三『拾遺集』別・三三七

その人のおがにおはゆるから衣忘らるなとてぬげるなりけり

『貫之集』七五六

橘公頼は承平五年(九三五)大宰帥に任官、翌年十一月下向。七五六番歌は、七五五番歌の「尾張の守藤原のおきかたがめのくだるに、ぬささうぞくやるとてくはへたる」に続く歌。興方の妻は、かつて貫之の妻と考証される。

(11) 詞書に「おなじ御時(延喜御時)」「延喜御とき」と記される『公忠集』三一・三五番の「からころも」詠歌もあり、周辺家集とも呼応としてイメージ生成が促されたと推測される。

(12) 片桐洋一『元良親王集全注釈』(新典社 二〇〇六年)解説。

(13) 注(12)当該歌の注釈。

(14) 島田とよ子「京極御息所褒子について―『大和物語』六十一段を起点に―」
『園田国文』一九九六年三月。

(15) 「からころも」を用いる同様の趣向の歌が、『後撰集』恋二六二番のよみ人しらず歌にある。

(16) 注(12)文献参照。

(17) 大納言源昇の娘については、『本朝皇胤紹運録』の記述に宇多天皇第七皇女依子内親王母と醍醐天皇第四皇子重明親王母の両方を「源昇女」とすることから、どちらであるのか、二人が姉妹であるのか、それ以外の女性であるのか、見解の分かれるところである。『元良親王集』からは不明と言わざるを得ない。

(18) 『うつほ物語』の用例は次のとおりである。

唐衣解き縫ふ人もなきものを涙のみこそすすぎ着せけれ

(実忠) 『うつほ物語』藤原の君

今はとてたつとし見れば唐衣袖のうちまで潮の満つかな

(種松妻) 『うつほ物語』吹上上

いく度か夜に返すらむ唐衣かへすがへすもうらみらるるは

(兼雅) 『うつほ物語』祭の使

からころもたち馴らしてし百敷の袖凍りつる今宵なになり

(仲忠) 『うつほ物語』蔵開中

恨みけむほどは知られでからころも袖濡れわたる年ぞ経にける

(女三宮) 『うつほ物語』蔵開中

* 本稿における『源氏物語』ならびに物語作品の本文引用は、すべて新編日本古典文学全集(小学館)による。